ドイツ視察記（第三回）

伊藤一男

古城の森に歌声があふれる黒い空には星ひとつない。市長の歓迎のあと、ぼくらは青年たちの集会に参加した。焚火を囲んでフォークの大合唱肩組み踊りだす。底ぬけに明るい。言葉なんかいらない！ジェンカと炭鉱節を踊ってみせると、すぐ「ヤーパンダンスイグOK！」と後についてくる。そのうち市長も奥さん同伴でゲームの輪に加わった。

日本では考えられない風景である。人口五百人のカステルは、古城と教会と緑の美しい田舎町である。南独バイエルンの村々の中でも特殊な感じのする地域だ。作家や教授などの文化人が多く、町角でばったり領主さまと会ったりする。石畳の道をゆくと、町のはずれにポカッと花咲く墓地があったり、ブドウ畑に小鳥の群がびそんでいたりする。のどかだが心に焼きつく風景をもった街だ。

東西ドイツ国境線

―大農経営におどろく―

バイエルンは麦刈りの季節であった。コンバインがどんどん小麦を収穫してゆく。一慣した大型機械による作業なので、驚くほど能率があがる。しかし、ドイツの畑は灰色ばんでいて見るからにやせた大地である。麦類にしてもコーン や菜種にしても収穫は日本の三分の一位いだろう。だから広大な面積を高能率で耕しているのだ。

ぼくたちが訪問したフランツ家では一七四町歩の畑作を経営しており、六台のトラクターが毎日はしり廻っている五年前までは二十人の労働者がいたが、機械の導入によって四人まで省力できた。サトウ大根（ビート）とブドウの栽培で貴族のような生活をしている。主人は皮靴はいて車で農場まわりをする。ドイツでは一五パーセントの人々が国土の八〇パーセントを占有している。日本のような土地改革もなく、寄生地主的な大農経営が可能なのだ。だが一方では農業労働者から独立した新しいタイプの農民も生まれてきている。ドイツで「農民」というのは、経営者よりむしろ作業に従事する者たちである。

―陽気な人々の中で―

バイエルンの人々は陽気者ぞろいだ。一日の仕事がおわると、男たちは酒場にあつまって、一杯の黒ビールで夜中まで騒ぐ。引率者のニーセンやロベルトと何度か飲みにいったが、実に明るい雰囲気で快かった。日本のバーのようにホステスはいない。ただ飲んで食べるだけの店だ。ここのワインは領主さまの醸造する地酒で、城館の庭に地下二階のワイン工場があり、ブドウの栽培から販売まで一慣して醸造している。甘口のワインをちょっぴり覚えた。宿舎は女子職業学校の寮で、昼間はバンベルグやバイロイト・ビュルツブルクなどの都市へバス族行を楽しんだ。好奇心のつよいドイツ人は、行く先々で盛んに話かけてきた。通訳が悲鳴をあげるほど、長い質問をぶつける学生、ただ握手して笑っている老人など、親日的な雰囲気に圧倒された何よりも子供たちは親しみやすく体ごとぶつかってくるのだ。

―国境の町をゆく―

ベルリンに向う前日、ぼくたちは国境の見学にでかけたバスでケネスフオーヘンの町までゆき、町の庁舎で宣伝映画を見たあと、東独との国境にたつ。コンクリートの柱と電線で区画された「国境線」は延々一、四〇〇キロにも及び周辺には人家は一軒もなく、働く農夫の姿もない。共産側には見張台と地雷源があり、武装兵士が絶えず警戒を続けている。バイエルンタワーから眺める東独の風景は、麦畑と丘陵と森だけであった。東と西に分割され肉親や恋人を引裂かれた人々、自由を求めて国境に死んだ人々、その悲痛な現実にぼくは怒りを感じた。残り少ないフイルムにその「現実」を鮮烈に焼きつけて帰ろうと思った。国境の寒々とした風景の中で思想よりも社会体制よりも大切な「人間」のことを考えていた。決して日本にドイツの悲劇を再現してはならないと、このことはベルリンの壁に接して、さらに烈しく迫ってくるのだった。

工業統計調査実施される

通商産業省では今年も十二月三十一日現在で、工業統計調査を実施することになりました。この調査は統計法に基づく指定統計調査で製造業に属する、すべての事業所が調査の対象となります。調査にあたっては調査員が各事業所に伺い調査票の記入をお願いいたしますので、該当調査事項についで記入の上指定された期日までに提出されるようお願いいたします。尚皆様から提出された調査票の内容については統計目的以外の資料には一切使用されませんので正しい報告をされますようお願いいたします。